

佐嘉藩と大村藩の、慶応四年の藩境絵図の間違い問題を追究しているうちに、手書彩色で尺寸まで記入した丁寧な絵図にも、多くの間違いがあることが分った。絵図を見る場合に注意せねばならぬ点である。

薩長に限らず、官軍諸藩の指導者や重役の多くの勤皇討幕についての本音は、天皇親政の実現よりも、論功行賞により関心を持っていたのであるまいか、との疑問が私の考えから消えない。

注

- ① 古賀敏朗「佐嘉大村藩境の神六藩境塚の謎」西日本文化 一一一―号 一九七六
- ②③ 長崎県立図書館蔵
- ④ 松浦史料博物館蔵
- ⑤ 佐嘉藩家老大配分二一七〇〇石 笹原峠は多久領境にある
- ⑥ 多久市立図書館蔵
- ⑦⑧ 佐賀県立図書館蔵
- ⑨ 平戸領志佐田野原村と佐賀領筋絵図 松浦史料博物館蔵
- ⑩ 為取替一札井塚帳 長崎県立図書館蔵
- ⑪ 大仏次郎『天皇の世期』朝日新聞社 一九七二 九卷年表
- ⑫ 瀬戸精一郎『長崎県の歴史』山川出版 一九七三 二一―八頁
- ⑬ 城島正祥『佐賀県の歴史』山川出版 一九七二 一六〇―頁
- ⑭ 滝口康彦『佐賀県歴史散歩』創元社 一九七三 一八五―頁
- ⑮ 小西四郎『日本の歴史』一九卷 中央公論社一九六六 四八〇―頁
- ⑯ 井上清『日本の歴史』二〇卷 中央公論社 一九六六 一五八―頁

〔文献紹介〕

谷岡武雄著 聖徳太子の榜示石

「ほうじいし」という名称を聞くのは久しい。筆者（紹介者）がそれを最初に聞いたのは、確か一九四七年の夏、著者谷岡先生の揖保川・夢前川・市川流域の条里調査に畏友西田政義氏と同行した際であった。その頃、筆者はまだ地理学を専攻しようとしていた学生である。条里遺構の阡陌の畦畔を歩きながら、著者から榜示石の説明をいろいろと聞いた。それからはや三〇年になる。その時の著者が紹介者である筆者に歴史地理学への一つの道標を示して下さった。今も変りはないが、著者の孜々とした学究的態度、エネルギーな行動、それに古代世界への憧憬は深く、分析は明晰であり、その方法は精緻で手際良い。それらに魅せられたのは筆者だけではなからう。著者の数多い著書が、それらを物語るが、本書もまたその一つである。そのいずれの頁を開いて読みはじめても、未知の古代世界へと誘われるであろう。著者は調査において常に細心の注意を払い、一木一草、路傍の石に至るまで、限らない古代への夢を求める。これが本書である。一つの石がこれ程までに古代世界を展望するレンズの役割を果たすとはわれわれは想像もしなかった。まさしく和製シャンポリオンである。その石に関心を抱いてから、三〇年にして一つの著者に集大成するという著者の慎重な態度にも好感がもてる。

著者の榜示石の夢は、筆者にも大きな刺戟を与えた。筆者は卒業

後、著者と共に東播平野の条里を調査し（地理学評論二七卷七・八号一九五四年）、さらに、当時条里研究が全国的に盛んになってきたので、条里調査の方法と着眼点を世に問うことにした（藤岡謙二郎編 人文地理学研究法 朝倉書店 一九五七年）。なお、今は本書によって榜示石の全貌が明らかになるうとしているが、かつては境界の標示石ということで、種々の説明を聞いた。境界は領域・所有を明示する指示物であり、権利や財産を維持するために不動物として設置され、宗教的背景が存在する場合が多い。ローマのテルミヌスの神話も永くローマ社会に根強く影響している。この神話に関連して、ローマのケントウリア景観の持続性について追究しようとした拙論（岩手大学学芸学部研究年報二〇巻一九六二年）も、一つには榜示石のエピソードが刺戟の香りを漂わせてくれたことを忘れないう。

そのようなことは筆者だけではない。本書のシリーズにあるが、畏友桑原公德氏が「地籍図」に興味を抱くようになったのも、実は著者谷岡先生の播磨研究に端緒を求めることが出来る。

遠古の世界を探るには、遺物・遺跡によらなければならないが、遺物・遺跡が消滅している場合が多く、地表面に残存する遺跡の微地形や古地図・地籍図・史料および伝承などから溯及的に追及する方法、すなわち、歴史地理学的手法が尊重されるのである。そこで地籍図の利用を上手に熟したのが、著者谷岡先生である。この点において、本書は歴史地理学を志す者にとって必読の書であろう。

なお、著者は榜示石を解釈するのに、斑鳩等と生活地域の基礎地域から説明し、さらに、聖徳太子と古代の開拓を論じ、鵜荘の盛衰

に論及している。それらの説明には、地域体系に沿うようにして、小・中・大地域へ解釈が及び、遂にはグローバルな観点からの分析になる。このような観点は著者の最も得意とするところであり、他に余り類のない特徴である。この点、著者谷岡武雄教授は比較方法を根底に置きながら実践的に歴史地理学のあり方について、静かな警鐘を鳴らし続けているように筆者（山田）には本書から感じられる。

（B6判・二三六頁・学生社・一二〇〇円）（山田安彦）

〔第八四回例会の報告〕

去る一月二七日、日本大学文理学部において、日本大学地理学会と共催で第八四回例会が開催され、次の報告がありました。なお例会終了後、付近で懇親会が行なわれ、米倉会長も遙々広島より参加されて盛会裡に終了いたしました。

農地改革前後における土地所有関係の変化

〔要旨〕

小倉 真

日本農村の基本構造は第二次世界大戦後の農地改革をはじめとする一連の改革によって大きな変容を遂げた。しかし、一方では今日の農村において、依然旧地主層の影響力が強く動いているという指摘がある。このような指摘をふまえ、農村支配機構を説明するには戦後の農村改革の基底となつた農地改革において、地主、耕作地主、小作等の各階層がどのような変動を行なつたかを分析する必要がある。この場合、従来の土地所有規模による分析のみならず、土地の生産力視点からの分析も必要である。本報告では、埼玉県越ヶ谷市